

真鍋俊明先生新刊

皮膚付属器腫瘍の病理 (二巻組)

本書の構成

volume 1

毛・毛包上皮細胞腫瘍

volume 2

腺系上皮細胞腫瘍の定義と概念

脂腺細胞系腫瘍

エックリン・アポクリン

導管・腺上皮細胞腫瘍

書影



付属器腫瘍を根本から読み解く
皮膚科医・病理医を
確かな理解へ導く書籍

価格

19,800 円 (税込)
* 送料無料

発行: 一般社団法人PaLaNA Initiative

著者: 真鍋 俊明



1971年山口大学医学部卒業後、米国にて病理研修・教育に従事。川崎医科大学教授、京都大学大学院医学研究科教授・病院病理部教授を歴任。退官後は滋賀県立成人病センター（現総合病院）で要職を務め、現在は堺町御池病理診断科クリニック顧問。あわせて（一社）PaLaNA Initiative代表理事として、遠隔病理の普及にも尽力している。

ご購入はこちらから



<https://palana.stores.jp>

著者まえがき

著者は、今まで50年以上にわたって診断病理学を勉強し、その間自ら経験したり、他の先生方から直接見せて頂いたりお送り頂いた興味ある症例、学会その他から依頼されたコンサルテーション症例の切片標本やその組織写真を蒐集してきました。その範囲は、ほとんどの臓器や病変に及んでいます。それらを使って何度も学び直し、考えることによって、自らの意見を持つことが出来るようになったと思っていますし、何度も講演や講義にも使用させて頂きました。これらで得られた知識や材料をそのまま放置しておいたのでは、あまりにも勿体ないし、送っていただいた方々にも申し訳ない。少なくとも、皮膚病理に関しては、著者がそれらから考え、得たものをまとめ、多くの先生方に還元するとともに、さらにはこれから皮膚病理を学ぼうと思っている若い先生方にも提供し、新しい知見を得るための役に立てて欲しいと考えました。一旦書物として出来上がったのですが、機器の損傷によってその資料を失ってしまいました。本書は、分散していた資料を集め、再度まとめたものです。

本書では、今まで皮膚付属器の3つの領域に独立させていたものを、総論的記述とともにまとめ直し、二冊の分冊としました。図は各領域のものであることが分かるように、その領域に合わせてF（毛包系）、G（腺系総論）、S（脂腺系）、EA（エックリン・アポクリン系）の標記の後に数字を入れることにしました。また、講義録としてまとめていましたので、“です・ます調（敬体）”で書いていたものはそのまま踏襲しています。肩こらず、臨場感を持ちながら読んでいただけるのではと思っています。

正常構造の正しい理解なしには、異常時、今回の場合は腫瘍ですが、その腫瘍の成り立ちや組織像の正しい解釈はできません。本書では、正常構造についてかなり詳しく記載しています。また、同一腫瘍に関しても、多くの症例をみないとその腫瘍に現れ得る変化の幅、すなわち発生の方向性や成熟の程度、腫瘍にみる経時的变化chronologyが分かりません。本書では、各腫瘍の病理組織発生過程や経時的な腫瘍形態の変化をできる限り記載するようにしました。単なる仮説にすぎないかも知れませんが、考えるべき命題であることは事実だと思います。ただ、遺伝子変異等に関しては多くを記載していません。それはその変異の特異性や意味するところが未だ十分に理解されていないためです。

本書で述べた著者の解釈の中には誤ったものがあるかも知れませんが、それを批判し、より正しい理解へと進めていくのが読者の仕事だと思いますし、著者が期待するところでもあります。この書物を表表紙から裏表紙まですべてを通して、そして新たな症例に接した時に再度繙いて、読んで頂ければ幸いです。

最後にお詫びです。ページを開いて頂くとお分かりだと思いますが、本書は素人づくりです。いろいろな難点があることと思います。その最大のものは索引がないことかもしれません。疾患の検索には目次に記載されたページを利用して頂ければと思います。

書評

皮膚付属器腫瘍は、形態の多様さ、類似病変との鑑別の難しさ、成熟や分化の多段階性などにより診断に悩まされることが多い領域ですが、本書はその“迷いどころ”に実践的に応えてくれる良書です。

類著が「各論」、すなわち疾患ごとの特徴や鑑別ポイントに紙幅の多くを割く傾向があるのに対し、本書の大きな特徴は「総論」の重視にあります。皮膚付属器の構造や発生背景に注目し、「ユニット」として毛包、脂腺、アポクリン腺などを体系的に解説し、これらを深く理解した上で各腫瘍の診断ポイントを紐解いていくという構成です。こうした構造の理解に基づく総論的アプローチは、読者に「病変を見る目」を育ててくれるという意味でも非常に教育的です。見慣れた所見の裏にある背景を知ること、形態の解釈がより深まり、診断の確度や納得感が大きく変わってくることを実感できるはずです。

豊富な実例や組織写真が掲載されており、所見の背後にある形態学的な意味を自然と理解できるように工夫されています。また、私家版ならではの自由なレイアウトと豊富な図版により、著者のレクチャーを受けているような感覚で読み進めることができ、診断中にも活用しやすい設計になっています。

第1巻では毛・毛包上皮細胞腫瘍を、第2巻では脂腺・エックリン・アポクリン導管・腺腫瘍を網羅し、良性・悪性に加え、成熟度や分化方向といった診断の鍵となる視点も自然に身につきます。唯一、索引がない点を使いづらく感じる方もいるかもしれませんが、それはむしろ「最初から最後まで通して読んでほしい」という著者の静かなメッセージかもしれません。

皮膚病理に携わるすべての方へ。手元に置いて、繰り返し開きたくなる2冊です。

(医療法人堺町御池病理診断科クリニック 原田大輔)